

蟲毒の檻

丸焼きどらごん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

フリーザ様から星を買う宇宙人ってどんな奴だろう、という妄想から生まれた短編。

目次

蟲毒の檻	1
おまけ	13

蟲毒の檻

私の名はイプシロータ。とある種族の女王である。

正確には分からないが、今から数百年か、数千年前か……とにかく遙か昔に、私はこの世界に生を受けた。しかしその命の形も、存在そのものも異質で歪なものだった。

音も光もない、とても静かで暗い場所。そこに、気づけば生命として浮かんでいた。後にその場所が宇宙と呼ばれる場所だと知るが、生まれたばかりの私はとにかく混乱した。……なにも知らずにいれたなら、きつと生まれた場所に疑問を抱く事も無く馴染んだであろう。しかし私には「前世」とも言うべきものが存在し、そこで生きていた「人間」の記憶がその邪魔をした。この異質で孤独な場所をその記憶が拒絶したのである。

まず百年。発狂と自失、覚醒を繰り返し、ようやく宇宙に慣れた。その頃には自分がどういった存在であるかもおぼろげに理解しており、睡眠も食事も必要としない体を不思議に思ったものだ。……どうやら、私は確固とした肉体を持たない精神生命体のような存在らしい。

更に百年。慣れたとはいえ孤独に耐えられず、自分以外の意志持つ生命を探して宇宙をさま回った。しかし私はよほど辺鄙な場所に居たらしく、長らく誰にも会う事が出来なかった。百年などと言っているが、当時は時間を計るすべなど持ち合わせていなかった。ので本当は千年だったのかもしれない。

更に百年。私は自分に特殊な能力があることを知覚した。どうやら私は、自分のイメージしたものを体の中にある靄のようなエネルギーを使用して具現化する事が可能なのである。それによって私は「人間」の記憶を呼び覚まし、様々なものを生み出した。食べ物、書物、機械、植物。永遠とも思えた孤独がそれによって少し癒されたが、宇宙という環境では形を保てる物は限られてしまい、私は自分が生み出したものが滅びる様を幾度となく見る事となった。

酷かったのはその後だ。

孤独だった私が、何を一番に求めるか。それを考えれば、いずれ私が生み出すもの果てが見えただろう。しかし私はそれに気づかず、少しでも何か自分以外のものが増えるようにと想像し、創造し続けた。……………その結果、私は生き物を生み出すようになってしまった。

しかし自分以外の生き物を生み出すことでようやく孤独から逃れられるかと思えば、そうではない。……………私が生み出す生物は、そのことごとくが宇宙という環境に耐えられなかったのだ。

虫、魚、鳥、犬、猫、熊、ライオン、ねずみ、猿……………そしてやがて「人間」を作った。しかしそれら全て、生まれた瞬間にもがき苦しみ死んでゆく。しかも私の孤独がもたらす欲求はとて強かったようで、生き物たちが死ぬ様を見たくなくて生み出すことを拒否しようとしても深層心理下で求めてしまうのか……………やがて一定の間隔で必ず生き物を生み出すようになってしまっていた。

だから私の周囲はガラクタの山から、日に日に死体の山へと変わっていった。きつと傍から見たら地獄のような光景だっただろう。しかしその中心に居た私こそ、正に生き地獄だった。……………せめて死ねたら楽だったろうが、私は「人間」ではない私がどうやれば死ぬのか皆目見当もつかなかったのだ。

そこから更に百年、発狂の中で生きていた。

ああ、何故死んでしまうの。何故生きてはくれないの。何故私を一人にするの。

いくら嘆こうとも、苦しみの連鎖は終わらない。

しかし宇宙をさ迷い続けて数百年目……やっと「生命」が生きることができ環境の星を見つける事が出来たのだ。それまでもいくつか「星」と呼べるものは見つけたが、そのどれもが生命が生きるのに適した環境ではなかったのである。……その中でやつと見つけた、私の希望。これでようやく、生み出しては死なせ続けた我が子達を育むことが出来ると思った。

だが、その星には先住民が居たのだ。そして彼らは、自分たちと違う生命……私たちを拒絶した。きつと、私の姿が彼らにとつて化け物に見えたからだろう。だから私が生み出す子供たちがいくら普通の姿でも、恐れられた。……前世の記憶と照らし合わせれば、人間型の姿であるその星の住民が私を異質に感じた理由も理解出来よう。しかし、私の希望が打ち砕かれた事には変わりない。……戦う力をもたなかった私は、成すすべなく目の前で我が子らが殺されるのを見るしかなかったのである。

けれど、やはり私だけは死ぬず……再び宇宙に舞い戻ることになった。どうやらこの身は戦う力こそないが、精神生命体であるため他者に干渉されることが無いらしい。まったくもって、忌々しい事よ。

生み出しては死なせ、彷徨い、私はただひたすらに求めた。我が子らが安寧に暮らせ

る地を。

そしてこの世に生まれ出でて幾星霜の時を経て……私は運命的な出会いを果たす。私はその者を見た瞬間、恥も外聞もなく申し出ていた。

『あなたが望むものを、対価として存分に差し出そう。だからお願いだ。生命が暮らせる星を、どんな手段を使ってもいい。貴殿の力で奪ってくれ。そして私に売ってほしい』

+++++

「フリーザ様。クライアントがフリーザ様にお会いしたいと訪ねてきていますが……」

「おや、どなたですか？」

「イプシロータ様です」

「ほほっ、またですか。性懲りもなくまた星が足りなくなつたようですね。……いいでしょう、通しなさい」

フリーザの命を受け、ザーボンは「承知いたしました」と頭を下げ、客人を招き入れる手配をするため退室した。それを見送りつつ、フリーザのもう一人の腹心であるドドリアはニヤリと笑みを浮かべた。

「まったく、いいお得意様ですねえ、あの女王様は。これでいくつ目のお買い上げでしたっけね？」

「たしか八個目ですよ。ドドリアさん、私はいつものように彼女とお茶をしますので準備を」

「かしこまりました」

そしてドドリアが手配し客人を招く場が整うと、タイミングよくザーボンが客……イプシロータを連れて室内に入ってきた。フリーザは大仰な仕草で腕を広げると、友好的な態度でイプシロータを歓迎する。

「お久しぶりですねえ、イプシロータ。どうやら相変わらずの子だくさんのようで」

『ええ、お久しぶりですフリーザ。毎回、世話になりますね』

イプシロータ……そう呼ばれる客人は、一見巨大な蜂と蟻を掛け合わせたような昆虫型の宇宙人だ。しかしその身は半透明で、手を伸ばしても実体に触れる事は出来ない。そういう種族なのである。……といっても、フリーザはイプシロータ以外に彼女と同じ種族を見た事はないのだが。彼女は子供を生み出すが、それらは直接イプシロータから”産まれる”わけではないので彼女の同種、というわけではないのだ。便宜上フリーザはイプシロータと、彼女を女王とした生物の群れをまとめて一族として扱っているが、少々ややこしい。

虫の姿の女王はその”声”も独特で、意味こそ伝わるものの声帯から発しているわけでは無いか「言葉」というより「音」を聞いている感覚に近い。

イプシロータは勧められた席へ移動すると、用意されていたティーセットを見て嬉しそうに礼を言った。表情こそ虫の顔なのでほとんど分からないが、彼女は意外と感情豊かなので雰囲気伝わってくるのだ。

『いつもお気遣いありがとうございます』

「いえいえ、大事なお得意様ですならね。これくらいかまいませんよ」

イプシロータは睡眠も、食事も、排泄も必要としない。よって飲み物を用意しても無意味なのだが、どうにもこの女王様は「知人とお茶をする」というシチュエーションが

好きらしく、こういった事をとても喜ぶのだ。フリーザとしても大事な得意先……地上
げた星を売る相手であると同時に、それなりに付き合ひの長い相手であるため多少の
手間は許容範囲である。といっても、フリーザは部下に命じるだけなのだが。

「それにしても、あなたの種族は弱いくせによく繁殖しますねえ。ああ、弱いからこそ数
が増えるのでしたっけ」

『ふふつ、事実ですが言ってくれますね。……ええ、私の子供たちはとても弱い。そのた
め、自力で新しい生活圏を確保できぬのです。だからフリーザには感謝していますよ。
貴方に出会えてよかった』

「ホーツホツホー！ 最初、あなたが私に星を奪って売れだなんて言ってきた時は何事か
と思いましたがね。ゴミみたいに弱いくせに、なにをこの宇宙の帝王に命令するのか生
意気な……と」

『でも、それがきつかけで地上げビジネスを始めて軌道に乗ったのですからいいじゃあ
りませんか。ただ強いだけより、宇宙の帝王としての威光は広がったでしょう？ 素晴
らしい趣味を提供したと、褒めてほしいくらいです。……それにしても、いつも思いま
すが私はとても弱いのに、なぜ貴方にも殺せないのでしょうか。我が子らには悪いです
が、いつそ殺してもらえたら色々考えずに楽なのに』

「それはもう何度も試したでしょう？ 諦めなさい」

そう言いつつも、フリーザはものの試しに人差し指をつきだしイプシロータに向けて光線を放つ。が、それはイプシロータをすりぬけて、その後方に居た兵士の頭を貫いた。しかしその兵士が死んだことなど兩名とも気にもかけず、会話は続く。

「ほらね？」

『残念です』

イプシロータは宇宙をさま迷った末に、とある惑星でフリーザと出会った。そしてイプシロータにとっては最早忌々しいものでしかない前世の記憶に、彼の姿はあったのだ。

記憶の中の彼は漫画の中の敵役として描かれていたが、イプシロータにとって重要なのはそこではなかった。彼女にとって注目すべき情報は、フリーザが「星を原住民から武力で奪い、他の宇宙人に高値で売る」という仕事をしている事。……生まれてはすぐに死にゆく我が子たちのために安寧の地を探していたイプシロータにとって、彼との出会いは渡りに船だったのである。救世主、と言ってもいい。

すでに精神的に極限状態だったイプシロータは、記憶の真偽など関係無かった。ただ、自分が求めるものを満たしてくれる可能性がある相手が目の前に現れた事実に絶ったのだ。

しかしイプシロータが出会ったころのフリーザは、記憶の情報とは異なり地上げビジネスを行っていないかった。そこにイプシロータが依頼を持ち込み、色々悶着はあったが成立。……奇しくもイプシロータは、フリーザのビジネスのクライアント第一号と相成ったのである。

ちなみに代金だが、一度見たものならばどんな物質でも自らのエネルギーで生み出すことが可能であるイプシロータはその時々でフリーザが望む物資を生み出し対価として渡している。それがどんなに貴重な物であろうと、イプシロータは想像だけで生み出すことが可能なのだ。

そんな便利な依頼人である女王イプシロータ。フリーザは彼女自身に危害を加えることは出来ないが、その子供たち相手ならば可能だ。そのためやろうと思えばフリーザはイプシロータの子供たちを人質にして脅し、いくらでも好きな物資を生み出させることもできる。しかしそれをしないのは、兩名の間に商売人、依頼人としての信頼が確立しているためだ。……信頼というには、いささか奇妙な関係ではあるが。

イプシロータは、常に生命を産み続ける。そして彼女が生んだ子供らも、生殖し増えていく。……すると、あつという間に星一つでは足りなくなるのだ。そのため自分の一族達の生活圏を確保するために、彼女は常にフリーザから地上げされた星を買い続け

る。……そしてそんな彼女にとって、見過ごせない事があった。

忌々しい前世の記憶。その中にある物語で、目の前の救世主はいずれ死ぬ。

(それでは、困る)

何が正義なのか、何が悪かなど、どうでもいい。愛すべきは我が子だけ。

ならば、か弱い自分達がこの先も繁栄し、生き続けるために……目の前の帝王には生きていてもらわねばならぬ。

『ところで、今日は依頼の他に興味深い話があるのですが……お時間もう少し頂いても？』

「ほう……。いいでしょう。丁度退屈していた所ですし、話してもらってもかまいませんよ」

女王は心の中でほくそ笑む。

『スーパースァイヤ人についてと、破壊神ビルス様とかの方の簡単な殺し方。……あなたの体に眠る、黄金の可能性』

更に覇権を握るがいい、宇宙の帝王フリーザよ。誰にも干渉されぬよう、完膚なきまでの力を手にいれてしまえ。

（我らはその陰で、ただただ生きよう。我が一族が健やかなままに繁栄し、私はそれを見守れたならばそれでよい。そしてそのためには……あなたが必要なのだ、フリーザよ）

女王は帝王に未来を委ね

り、宇宙は緩やかに絶望への道を辿ってゆく。

この時よ

蟲毒の檻 おまけ

遙かのちに、とある神がひとつの生命体をこう称す。

「歪だ。界王神でもないのに」創造を可能としている。しかし、それがもたらすのは
”滅び”だけ」

その生命体は、たった一匹の虫だった。

+++++

我が子供たちの繁栄のため、フリーザの地位を盤石なものにするべく動き出してから早くも数十年の時が流れた。

私にとって本来瞬間であるはずの時間だが、安住の地を手にいれ、時間という概念をしつかりと知覚できるようになってからは以前より時間を長く感じるようになった気がする。これが喜ばしい事なのかどうかという判断は、残念ながら今の私にはできない。

私はフリーザに「新たに予言の力が備わった」とほらを吹き、前世の記憶にある情報を伝えた。最初はうさん臭そうにしていたフリーザだが、私の「何も無い所からエネルギーのみで物質や生物を生み出す」能力を省みれば、そのような特殊な力が備わってもおかしくないと思ったようである。最終的には「貴女が、私の機嫌を損なうまでわざわざくだらない嘘をつくとは思えません。……いいでしょう。破壊神にも届きうる強さには興味がありますし、修行とやらを試してみましようか」という言葉を引き出すことだ出来た。

たしかに、私はフリーザにすぎるとしか我が一族の繁栄を手助けすることができないため、彼の機嫌を損なう事は極力避けている。しかしそれが相手に伝わり、理解をしても

らえたのはひとえにこれまで友好関係を積み重ねてきた結果だろう。

フリーザの気まぐれである可能性の方が高いが、そうだとしてみこんだ戯言を受け止めてもらえたのだ。結果としては大成功、といったところだろうか。

私はフリーザに、これから辿る可能性の高い未来について……私の中にある漫画やアニメ、映画においての「ドラゴンボール」と呼ばれる作品群の内容を「予言」として、情報のみを抜き取って伝えた。前世は忌々しい記憶ではあるものの、孤独な時間の中で唯一私が触れられた「自分以外のもの」。……何回、何十回、何百回、何千回、何万回……飽くほど繰り返し脳内で再生した記憶は、忘れる事も無く未だに私の中に焼き付いている。

そして私の持つ情報の中でも特に重要だったのはフリーザを倒すサイヤ人の男、孫悟空とスーパーサイヤ人についてだったが……これに関しては、実はあまり心配していない。

なにしろフリーザは、たった数か月修行するだけで孫悟空の長き研鑽の果てにある……神の力をも宿したスーパーサイヤ人と同等の力を手にいれることが出来るのだ。だからたとえ孫悟空がスーパーサイヤ人になってフリーザの前に現れようとも、第

一段階のスーパーサイヤ人では修業を経たフリーザ……ゴールデンフリーザには敵わない。

故に、サイヤ人に関してはフリーザが修行するならば奴らの母星を消滅させた後、生き残りを泳がしても構わないと言っている。

むしろ孫悟空をはじめとしたドラゴンボールの主要人物たちの動向は、予言の信憑性を裏付ける大事な要因となりうるのだ。流星に私も前世の記憶の通りに全てが進むとは自分でも信じられないため、彼らは貴重な情報源。……故に、地球にはフリーザの部下から一名、私の子供たちの中でも優秀なものを一名、孫悟空らの監視のために送り込む予定だ。

しかしフリーザは私の情報の中でも、スーパーサイヤ人よりも破壊神ビルスについて興味を示した。

「ホッホッホ、イプシロータ。この私が、破壊神をも越える可能性を秘めていると？」
『ええ。なにしろ、破壊神ビルスと互角とまではいかなくとも接戦を繰り広げた孫悟空と、修業したあなたは同格の力を有していた。たった数か月の修業でその域までたどり着けたなら、年単位で修業すれば破壊神をも越える可能性は十分にあるでしょう。……」

しかし破壊神は強き以上に「破壊」の力を持っているため、界王神を殺してさっさと殺めてしまう事をおすすめしますが』

「破壊神を殺したら、貴女が言う「全王」とやらが私を消してしまうのでは？」
『その心配はいらないでしょう。なにしろ未来で界王神や破壊神をはじめとした、多くの神々を殺した「ザマス」という神に何も制裁を下さなかつた方です。おそらく、何かあつても気づきもしない。……あの方にとって、一つの宇宙の事などほんの些事ではないのでしょね』

まあ、消されるなら消されるで、我が子ら共々滅べるのなら私はそれがかまわないのだが。

しかしそんなことを考えているなど悟らせぬよう、全王に関しては心配いらないうと私は堂々と言いつつ。ここで躊躇されては困るのだ。

……私の中には死ぬならそれでもかまわないという考えと同時に、子供らをいつまでも見守つていきたいという矛盾した気持ちがある。だからこそ、出来る限り「死」という終着点を選ばざるを得ない時が来るまでは……どんな手を使つても、愛する我が子達を生かし、繁栄させたいと願う。

それこそが、今の私の全てなのだ。

事は面白いように順調に進んだ。

惑星ベジータ消滅後、私とフリーザの遣わした監視の下……主人公孫悟空は、物語通りにその人生を進めていった。そしてベジータと地球での戦いの後、息子の孫悟飯と友であるクリリン、ブルマをはじめとした者達がナメック星へとドラゴンボールで願いを叶えるべくやってきた。その後を追い、孫悟空も。

赤ん坊のころから私と共に悟空を観察していたフリーザは、何を面白がったのか私の「予言」の通りにナメック星でのストーリーを進めた。そしてクリリンを爆死させたことによつて、怒りで孫悟空がスーパーサイヤ人に目覚めると……それを容易く圧倒したのである。それも現在の最終形態であるゴールデンフリーザになるまでもなく、本来のこの時間軸の最終形態である小柄な姿のまま。

しかし、フリーザは悟空を殺さなかった。

「思っていた以上に弱いんだね、君。スーパーサイヤ人、ちよつと期待していたんだけど……こんなものか」

「ぐ……がつ」

倒れ伏し、フリーザの脚で腹を踏まれてうめく孫悟空。それを私はすぐそばでじっと見守っている。フリーザはこのあと、どうする気なのだろう。

フリーザは無様に地を這う孫悟空を見下ろしたまま、なぜかしばし考え込む。そしてこう言った。

「フフフ……。君、もつと強くなれるんだろう？　なら僕にそれを見せてくれ」

『フリーザ、何を？　殺さないのですか？』

「ああ。君のお陰で修行し始めてどんどん強くなるのはいいけど、少し退屈だね。折角の力を振るう相手が欲しいのさ」

これはいけない、と。私は焦りを覚える。こんなの、後でその慢心が原因でやられる悪役のいいパターンではないか！

『慢心は死を招きますよ』

「でもねえ……。今の僕の力を越えられるとは到底思えないよ。今なら君の予言にあった破壊神が、スーパーサイヤ人ゴッドを求めた理由が少しわかるかな」

フリーザの楽しそうな様子に、これは言っても無駄だろうなと悟る。伊達に長い付き合いではない。

『……………わかりました。ですが、いずれ必ずあなたに牙をむく相手です。そのことは

お忘れにならないでくださいね』

その後、フリーザに見逃されて地球へ帰還した孫悟空達は、多少ずれはあるものの人造人間という新たな敵達との戦いを進めた。ちなみにフリーザの要望があつて、彼らの記憶を私が多少改変している。……フリーザとつるむようになってから知つたのだが、どうやら私は精神に干渉しうる力を持つているようなのだ。

だから彼らはフリーザを倒したものと思ひこみ、地球での日々をおくつている。……私が言えた事ではないが、少々憐れだ。

今思えば、フリーザは幼少期から見続けている孫悟空の成長を最後まで見ていたかつたのだらう。しかしそこに情などがあるわけではなく、あくまでも「暇つぶし」。地球人とサイヤ人は、フリーザにとっていい玩具となつていたようだ。

そういえば、この世界にはベジータの息子である「トランクス」はやつてこなかった。だから孫悟空は心臓病に倒れたのだが、それでは面白くないとフリーザは孫悟空にわざわざ薬を与える始末。……薬を開発し投与したのは監視のために送り込んである私の子供だが、もとのストーリーを知る私としては少々複雑である。なんなのだ、このフリーザは。

そして物語は進み、いよいよ魔人ブウの登場だ。

原作で言うところの「絶望の未来ルート」を進んだために人造人間編の敵は17号と18号であり、セルも少々遅い登場となったが先に17号18号を倒されていたため完全体になることもなく倒されたので戦士達の強化具合は正直おそまつだ。しかしこれに関しては「流れ」に参与した代償だと、私もフリーザも納得している。……いや、なぜ敵である戦士達のパワーアップがいまいちだからと「代償」なのか。

いけない、最近私もフリーザのお遊びに影響されている。

しかし、ここまで来たら私もフリーザもお遊びだけではいられない。何故なら、魔人ブウ編は何処とも知れない界王神界に引きこもっている界王神が地球まで出向いてくるからだ。奴を殺せば破壊神ビルスも死に、この宇宙での最強は間違いなくフリーザとなる。

これに関してはフリーザもビルスの強さ以上の「破壊」という力の危険性と、彼の付き人である天使ウイスの脅威を考慮して納得済みだ。いくら退屈してはいるが、わざわざ彼らと事を構えるほどフリーザはサイヤ人のような戦闘狂ではない。

事は実にあっけなく終わった。

魔人ブウ編を最初から観察していた私たちは、界王神界の場所も特定できた。そして密かに孫悟空の瞬間移動の技術を見よう見まねで盗み取ってしまっていたフリーザの瞬間移動により、ブウ編の決着がついた後の界王神界へ。……勝利に湧き、他の惑星へ避難していた界王神が戻ってきたところでその胸をフリーザが貫いたのである。

「ぐ、あ!？」

「な、オメエはフリーザ!？」

「お久しぶりですねえ、孫悟空。まあ私としては、久しぶりという気はしないのですが。……なにしろずっと見ていましたから。ブウとの戦い、お見事でしたが少々残念です。あなただけの力で勝利したわけではありませんからね」

「何言って……」

「ところで、界王神。あなた、神でありながらずいぶん見る目がありませんねえ……。私程度なら一撃で倒せる？ ほっほっほ。いつの私の事を言っているのでしょうか。まったく……腹立たい!」

言うなり、フリーザは界王神の胸から腕を引き抜きその首を落とした。

「か、界王神様!」

その突然の事態にうろたえる孫悟空達を尻目に、私はフリーザに提案する。

『生き返らされても面倒ですし、すぐにナメック星人を全滅させましょう。そうすれば時間が経とうとも、ドラゴンボールは使えません』

「おや、それはもつたいない」

『ですが、今さら叶えたい願いがあるわけでは無いでしょう？ ……………不老不死も、すでに手にいれているのですから』

そう。フリーザはすでにナメック星のドラゴンボールで念願の不老不死を手にいれていた。

ナメック星人たちは、実はすでに私たちの監視下にある。その自由も、ドラゴンボールも私たちのもの。

しかし私の願いはただ一つであり、それはフリーザが居れば叶えられる。そしてフリーザも願いを叶え、そうなればドラゴンボールはもはや用済み。…………破壊しても、かまうまい。

しかし、そうして宇宙を手にいれたフリーザだったが…………その末に、私の予想外の事

が起きた。

フリーザは「退屈」に耐えられなかったのだ。私がかつて「孤独」に耐えられなかったように。

宇宙の全てを手中に収め、正真正銘の最強となったフリーザ。だが、やがてその日々は単調な物へと変わってゆく。惑星支配という趣味もコンプリートしてしまった今、意味はない。

……そして刺激を求めたフリーザは、私に敵を求めたのだ。

「創造しなさい、私の敵を。知っていますよ？ あなたは創造した肉体に、意図的にあの世から魂を引っ張って来て入れることができます。つまり、今まで死んでいった戦士達の復活が可能！ フッフッフ、いいですねえ。それから、貴女が知る別の世界の戦士達も呼んでもらいましょうか！ 気まぐれにきかせてくれた物語。……当然、それらも創造できるでしょう？ ああ、本当に退屈で退屈で死にそうですよ。だけど死にたいわけじゃない。私には、私を満たす何かが必要なのです！ さあ、それを満たすために私の求めに応じなさいイプシロータ！」

私の生み出す生命体は、例外を除いてみな弱い。……その例外を、長い時を共に過ごすことでフリーザに知られてしまったのが運の尽きだったのだろうか。

例外とは、以前生きていた生物を想像した時。それを生んだ瞬間、その体にはもとの人物の魂が宿るのだ。……そしてそれは、信じられないことに前世の私が物語として知っていた他の世界にまで影響を及ぼす。だから私は未だ見ぬ強者を呼び出すことが出来るのだが、それらは私の生み出した生物でありながら一切私の言う事をきかない。私はフリーザに逆らう事が出来ない。それはすなわち、この宇宙で生命が生存可能な星の過半数を占める我が子供らの死を意味するからだ。

だから私はフリーザの求めに応じた。……フリーザが求める激しい戦いの末に、やがて宇宙が減じる可能性を知りながら。

応じて、応じてなくても我が子供らは死に絶える。……だが、ほんのわずかでもいい。長く生きてほしかった。

この宇宙は、まるで檻。呪いをもたらす、蟲毒の檻だ。

有象無象が生み出され、やがて喰われて最強の一匹だけが生き残る。そしてその一匹は、術者に繁栄と……やがて滅亡をもたらす。

この宇宙を呪いの坩堝にしたのはこの私。だからこそ、最後に檻もろとも不老不死のはずの最強の生命が消滅して……それでも私だけが滅びず生き残っても、それが私にとつての最大の呪い。最大の罰。

『ああ、孤独だわ』

宇宙でもない、なにもない、どこでもない、過去でも未来でもない、虚無の中。

私は一匹^{ひとり}、眩いた。